

1. 技術体系の特徴

品目	家族労働力	品目・栽培型及び規模		経営・技術の特徴	
施設野菜專業經營 V	人 3	ミニトマト促成		a 40	1. 接ぎ木セル苗購入 2. UVカットフィルム・防虫ネット使用 3. 交配はマルハナバチ利用 4. 共同選果 5. 炭酸ガス局所施用 6. 統合環境制御
		経営耕地面積	水田 40 畑		
経営目標		1 農業総収入	36,324 千円	4 1日当たり農業所得	11,707 円
		2 農業経営費	29,130 千円	5 1人当たり年間労働時間	1,639 時間
		3 農業所得	7,194 千円		

2. 資本装備と減価償却費

	種類・規模	数量	型式・構造・能力	所有割合	取得価格	耐用年数	年間償却額
					千円		千円
建物・施設	ビニールハウス(新設) (ハウス本体工事、二重カーテン、換気扇、灌水チューブ、電気工事込み)	2	長崎県型低コスト耐候性(50m):4000㎡	1	46,299	14	1,654
	重油タンク	2	1.9kL	1	365	8	
	防油堤	2		1	437	7	26
	農機具倉庫	1	軽量鉄骨 20㎡	1	1,080	25	17
	作業及び収納舎	1	軽量鉄骨 60㎡	1	3,240	24	45
	計					51,421	24
農機具	トラクター	1	20PS、140cm幅ロータリー装着	1	1,817	7	130
	管理機	1	6.2PS	1	200	7	14
	動力噴霧機	1	可搬式(5MPa)	1	213	7	15
	トラック	1	軽トラック	1	917	4	115
	加温機	2	600坪用(150,000kcal/h)	1	2,642	7	189
	循環扇	4	1セット/10a	1	704	7	50
	多段式サーモ	2	加温機取り付け	1	185	7	13
	炭酸ガス発生装置	2	1600~1800㎡用	1	822	7	59
	自動換気装置	4	1000㎡用	1	3,410	7	244
	自動カーテン資材(2層)	4	LSスクリーン2層張り、自動制御	1	11,296	7	807
	細霧システム	2	自動制御	1	2,676	7	191
	統合環境制御装置	2	モニタリング装置込み	1	3,524	7	252
	局所施用装置	2	ダクトファン	1	1,400	7	100
計					29,805	7	2,178

3. 技術体系(ミニトマト促成)

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時期	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
(セル苗定植)								セル苗定植の場合は、二次育苗を省略。 草勢が強くなる傾向があるので、注意する。
(本ほ)								
耕うん・整地		7月中旬	トラクター	2	2	4	堆肥 2t	完熟堆肥を施用し深耕する。
病害虫防除	土壌消毒 ガス抜き	7月下旬	トラクター	2	3	6	土壌消毒剤 古ビニール	県病害虫防除基準による。
施肥	基肥施用 耕耘	8月	トラクター	2	2	4	石灰質資材 100kg 磷酸質資材 20kg	施肥量は土壌分析を参考にする。 Nの分施割合 基肥 40%:追肥 60% 第3花房開花期から1段果房おきに液肥施用。
	追肥	10月～5月		1	30	30	10a当たり成分 N 30kg P ₂ O ₅ 25kg K ₂ O 30kg	
ビニール被覆	外ビニール張り 2重カーテン準備 防虫ネット設置	8月	トラック	4	12	48	ビニール一式 防虫ネット	(低コスト耐候性ハウスは、3年毎)
定植準備	うね立て	8月	管理機	2	4	8		うね幅 1.8m
	かん水施設設置	8月		2	3	6	かん水チューブ	
マルチ		8月		3	2	6	ポリマルチ	マルチは、低温期になるまで畦の肩部まで上げておく。
定植		8月		3	6	18		株間55cm(2条) 10a当り 2,020株
支柱立て		9月		3	8	24	支柱 エスター線 誘引ひも	横張りは、8～10段程度

(10a当たり人、時間)

作業の種類	栽培技術		作業体系				使用資材	技術の重要事項
	技術内容	作業時期	使用機械器具	組み作業人員	実作業時間	延べ作業時間		
管理	誘引	10月～5月		3	45	135	誘引ひも 誘引クリップ	2段までは直立に誘引し、その後は斜めに誘引する。
	腋芽かぎ 摘果 摘葉	10月～5月		3	38	114	ハサミ	腋芽は早めに除去する。 1果房当たり30～50個を目安とする。 摘葉は収穫が終わった果房までおこなう。
ホルモン処理 マルハナバチ 交配	着果促進	9月～5月		1	20	20	ホルモン処理剤 マルハナバチ	マルハナバチ利用による交配。 下段花房(1～3段)、厳寒期はホル モン処理を行う。
統合環境制 御		10月～5月	加温機 多段式サーモ 循環扇 自動換気装置 炭酸ガス発生装置 局所施用装置 統合環境制御装 置	1	30	30	A重油12000L 灯油1500L	厳寒期の保温対策の実施 最低温度 12℃以上確保 昼間温度 25～28℃ 炭酸ガス:ゼロ濃度差施用 自動換気装置、炭酸ガス、二重カー テンは自動制御
かん水		10月中～ 5月		1	30	30		着果後から徐々に量を多くする。 草勢に応じて少量多回数のかん水 を行う。
病虫害防除	薬剤散布 耕種的防除	9月～6月	動力噴霧機	2	36	72		県病虫害防除基準による適正使 用。 マルハナバチへの影響を考慮する。
収穫		10月～6月		3	240	720	コンテナ 収穫台車	
出荷		10月～6月	トラック	1	50	50		裂果果実の混入に注意する。
後かたづけ	ほ場環境浄 化	6月～7月	トラック	2	10	20		収穫終了後にハウスの蒸し込みを 行う。
計						1345		

